

## 特集 比較発達社会史の射程

青木利夫・柿内真紀・関啓子編『生活世界に織り込まれた発達文化—人間形成の全体史への道』が、2015年7月に東信堂より刊行された。同書は、編者の一人である関啓子による問題提起を受けて編まれたものである。すなわち、近代教育を批判的に検討し、〈育てる・育つ〉をめぐる発達文化にかんする比較研究の新たな地平を拓きたいという思い、より具体的には、(1)近代教育からもれた人びとの参加や包摂をどのようにとらえるのか、(2)育ちと発達(ひとりだち)を学校という制度からいかに解放するか、(3)学力から学校をいかに解放するか等の3点に着目し、近代教育の閉塞状況を打ち破り、突破する力をもめたいという問題提起である。

2015年7月4日(土)に一橋大学佐野書院にて、同書の紹介を兼ねた座談会が〈教育と社会〉研究会7月例会として開催された。座談会では、編者らが同書の目指したものについて紹介したうえで、上記の提起を各執筆者がどのように引き取り、どのような議論を展開したのか、この試みの到達点と今後の課題をどのようにとらえるかといったことについて意見交換がおこなわれた。

今特集は、その座談会での議論の記録、および『生活世界に織り込まれた発達文化』と問題意識を共有する2本の論文からなる。

『生活世界に織り込まれた発達文化』の議論の出発点となっている「発達文化」は、〈ひとりだち〉の概念、すなわち「この世に生まれ、育ち、働き、結婚し、産にかかわり、育み、老い、土にかえる過程で、そのつどそのつど意志をもって自分を表現すること、自分の生き方を決め、それを社会的に実現していくこと」(関1998:283)に関わるものである。〈ひとりだち〉を果たそうとする際、具体的にいかなる生き方を目指し、その実現のためにいかなる行動をとるのか。そこに他者はどう関わり、周囲の環境はどう関わるのか。こうした〈ひとりだち〉の構想と手立ては、その人が所属する社会集団(階級・階層、エスニシティ、暮らしている地域、宗教、世代、ジェンダー等々)によって異なっている。発達文化とは、社会集団ごとの文化に立脚する〈ひとりだち〉の構想と手立てにほかならない(関1995, 1996, 1998)。それは、「学校とそれを制度化する国家だけではなく、民族や言語や宗教などを軸としながらも、それが交錯する地域社会において、歴史、伝統、イデオロギー、風景、道具などさまざまな要素が複雑に絡み合っつくりあげられる」(青木・柿内・関編2015:vi)ものである。

もとより、これらの概念は〈教育と社会〉をめぐる問題関心から導き出されたものであるといえるが、今特集ではこうした概念によって読解可能となる問題領域をいま一度とらえなおし、〈教育と社会〉の研究と再接続させてみたい。

〈ひとりだち〉は、生き方を自ら決定し、自己実現のために、他の人間との関係、自然との関係を再組織化すること、より心地よく生きられるように自分と周囲との関係を新たに組み替えていくことを視野に入れているという点において、「発達」の概念では必ずしも十分にはとらえきれない個人の意思と、自己形成の過程において試みられる「社会」への働きかけを見ようとする概念であるといえる。ある「社会」に生きる個人が、「形成」を含みこむ人間形成の全過程をどのように経験する(してきた)のか、どのような困難をどのように克服しようとしている(してきた)のか、「教育」はそこにどのように関わるのか。〈ひとりだち〉および発達文化の概念にもとづく〈教育と社会〉研究は、人の成長・発達と「社会」との関わりを、生き方をめぐる諸個人の意思とその現れ方、そこに見られる困難や矛盾に注目しながら読み解くものであるといえるだろう。

その際に問題となるのは、文化に応じて多様であるはずの〈ひとりだち〉の構想と手立てのうち、どの部分に注目するのかという点である。批判を込めてたびたび指摘されてきたとおり、教育学においては学校教育をめぐる研究が中心的な位置を占めてきた。「学校化」された現代社会において、〈ひとりだち〉の構想と手立ての大部分に学校教育がかかわることになるのは避けようがないが、教育研究が学校教育を主

な関心の対象としてきたことで、学校的な発達文化が過度に再生産されてきたのではなからうか。

比較教育学の議論においては、リーグルが「教育システムの比較を行う際に、『教育システムとは学校システムにはかならないという考えを暗黙のうちに含んだ表現へと無意識的に陥ってしまうことの危険』が、多くの場合避けられなかった」（リーグル1988=2000：231）結果として、研究対象や理論が学校システムにかかわるものに狭隘化されてきたと指摘している。リーグルは、「学校の外側の事柄は学校の内側の事柄よりももっと重要であるし、それが内側の事柄を左右し、説明する」（Sadler 1964：308-309、リーグル1988=2000：232-233より）というサドラーの言を引きながら、「大切なのは、その背後に働いている諸因子であり、例えば、経済成長なり、生産・消費なり、労働の社会的・性的分業なり、『資本』と『労働』なり、労働と家庭生活なり、学校と産業の関係なりに関する規範的な諸水準といった事柄である」（リーグル1988=2000：234）と述べ、比較教育学における文化概念の重要性に注意を促しているが、このことは、歴史的日常性のレベルで発達概念を比較することを重視する「比較発達社会史」の出発点である「制度研究では読めない人びとの子育ての思いや子どもの未来をめぐる葛藤を読み解きたい」（中内・関・太田編1998：71）という問題意識に通じている。

さらに、比較発達社会史の研究には、それを通じて「ひょっとしたら、マイノリティ問題一般の解決に資する細やかなヒントを見つけ出せるかもしれない」（関2002：34）という期待が込められている。また、「学業正課（学力）、標準化や方法的アプローチばかりにこだわる研究がもたらすのは、西洋圏のミドルクラスの成功（階層の再生産）物語の正当化であり、その場合、『共に生きる』や『ケア』といった価値は無視されることになる」（関2012：29-30）という懸念を克服したいという意図もある。

関が思想史研究に取り組むなかで提起した〈ひとりだち〉および発達文化の概念を軸とする比較発達社会史の射程は、比較教育学や多文化教育論、異文化間教育論、移民研究、生活空間研究へと広がっている。「ふつうの人、一人ひとりが自己形成のドラマというタビストリーを織り上げる過程を、独り立ちの過程ととらえ、その歩みに寄り添う」（関2002：32）ことを志向する研究から、教育研究の狭隘化を克服する道が拓けるかもしれない。被支配的な発達文化を生きる人々の〈ひとりだち〉に寄り添い、自己実現のための資源を共に掘り起こしていくためにも、「学校化」された支配的な発達文化を相対化しうる研究を積極的に進めていく必要がある。

【文責：太田美幸】

青木利夫・柿内真紀・関啓子編（2015）『生活世界に織り込まれた発達文化—人間形成の全体史への道』東信堂。

関啓子（1995）「教育思想史研究の可能性」『一橋論叢』第114巻第2号。

関啓子（1996）「教育改革の思想史的研究の試み—ロシアの教育改革を中心に」『理想』第658号。

関啓子（1998）「比較発達社会史の冒険—ひとりだちをめぐるタタール人の葛藤の歴史」中内・関・太田編『人間形成の全体史』大月書店。

関啓子（2002）『多民族社会を生きる—転換期ロシアの人間形成』新読書社。

関啓子（2012）『コーカサスと中央アジアの人間形成—発達文化の比較教育研究』明石書店。

中内敏夫・関啓子・太田素子編（1998）『人間形成の全体史—比較発達社会史への道』大月書店。

リーグル, L. (1988=2000) 「文化と社会化—比較教育学における忘れられた伝統と新しい側面」(伊藤彰浩訳) シュリーバー, J. 編『比較教育学の理論と方法』馬越徹・今井重孝監訳, 東信堂。

Sadler, M. E. (1964) "How Far Can We Learn Anything of Practical Value from the Study of Foreign Systems of Education", in *Comparative Education Review*, vol.7.